

子育て家庭の生活と支援

—生活時間調査からの考察—

二方 龍紀

Lifestyle and Support of child-rearing Family: From the Time Use Survey

Riki Futakata

本稿の目的は、「子育て家庭」の生活時間の状況を知り、その支援の課題を検討するというものだ。子育て家庭の女性の家事・育児時間は、非常に長く、また、子育て家庭の男性の仕事時間は、最も長い。家事・育児時間は、「0歳」や「1～3歳未満」の子どもがいる家庭で特に長い、「3歳以上」になると減少する。時間意識に関する質問では、「子育て家庭」では、忙しいと答える割合が高かった。「仕事と家庭生活の両立」に関しては、「子育て家庭」で困難であるという意識の割合が高く、特に女性において高かった。

キーワード：「生活時間」「子育て家庭」「仕事と家庭生活の両立（ワーク・ライフ・バランス）」
「家庭支援」「社会資源」

1. はじめに

産業化・情報化・消費化が進み、社会全体が忙しくなっているといわれる。特に、子育て家庭では、仕事と家事・育児の両立が求められ、常に時間に追われるような生活になっているイメージもある。例えば、職業生活のような個々人の生活を規定する時間の枠組みは、社会全体の時間枠組に連なって規定されているために、個々人の努力だけでは、動かしがたい部分も大きい。そうすると、家庭生活の維持に必要な「家事」時間は、その職業生活と調整しながら、時間を確保するような家庭も多いだろう。そこに、さらに、子育て家庭では、「育児」、つまり、子どもの時間枠組みを、この生活時間の調整に入れていく必要がある。こうした「職業生活」「家事」「育児」の3つの時間枠組みがせめぎ合う中で、何とか調整しながら、子育て家庭の生活が営まれている。これが、子育て家庭を疲弊させる、一つの要因にもなっているのではないだろうか。

本稿の目的は、「子育て家庭」の生活時間の状況を知り、その支援の課題を検討するというものだ。そのために、まず、子育て家庭の生活時間の全体的な概要を確認する（2-1-1）。そして、夫婦で、どのように、生活時間が違うのかについても、確認する（2-1-2）。続いて、子どもの年齢別の生活時間を分析する（2-2）。子どもの年齢によって、子どもの生活時間が変わってくることから、それによって、「子育て家庭」全体の生活時間も影響を受けると考えられるからだ。

本稿で扱う生活時間調査では、生活時間に関する変数以外に、「ワークライフバランス」、「時間的余裕」、「家庭内ストレス」や「育児不安」に関わる意識も質問に含まれている。この「子育て家庭」の意識も、分析したいと考えている（2-3）。

「ワークライフバランス」というスローガンで、「仕事と家庭生活の調和」が、社会的なテーマと

なって久しい¹⁾。この調和のために、どのような支援が必要なのかという課題を考えるための一助になればと考えている²⁾。

2. 分析

2-1 子育て家庭の生活時間の概要

2-1-1 全体の概要

表1 「子育て家庭」/「非子育て家庭」別生活時間・全体平均時間（平日）				
		度数	平均(分)	検定
睡眠時間	子育て家庭	389	396.5	
	非子育て家庭	177	398.4	
	合計	566	397.1	
通勤時間	子育て家庭	389	34.1	
	非子育て家庭	177	36.7	
	合計	566	34.9	
仕事時間	子育て家庭	389	389.9	
	非子育て家庭	177	410.6	
	合計	566	396.4	
家事・育児時間	子育て家庭	389	288.5	**
	非子育て家庭	177	180.3	
	合計	566	254.6	
趣味時間	子育て家庭	389	126.2	**
	非子育て家庭	177	179.2	
	合計	566	142.8	
その他時間	子育て家庭	389	204.8	**
	非子育て家庭	177	234.8	
	合計	566	214.2	

まず、生活時間全体について、確認する（表1）。「子育て家庭」「非子育て家庭」別に、比較したところ、「睡眠時間」「通勤時間」「仕事時間」には、有意な差は見られなかった。一方で、「家事・育児時間」「趣味時間」「その他時間」には、有意な差が確認できた。

「家事・育児時間」は、「子育て家庭」の方が、約 110 分長く、288.5 分となっている。それに対して、「趣味時間」は、「非子育て家庭」の方が、約 50 分長く、179.2 分となっている。「その他時間」とされる食事・入浴・身の回りの用事などの時間は、非子育て家庭の方が、約 30 分長く、234.8 分となっている。

1 日 24 時間の中で、「家事・育児時間」が、2 時間近く違うというのは、大きい。この違いは、次項の男女別では、さらに大きくなる。

表2 男女別「子育て家庭」/「非子育て家庭」生活時間・全体平均時間（平日）				
		度数	平均(分)	検定
睡眠時間	子育て家庭・男性	186	394.0	
	子育て家庭・女性	203	398.9	
	非子育て家庭・男性	77	403.6	
	非子育て家庭・女性	100	394.3	
	合計	566	397.1	
	合計	566	397.1	
通勤時間	子育て家庭・男性	186	57.7	**
	子育て家庭・女性	203	12.5	
	非子育て家庭・男性	77	51.0	
	非子育て家庭・女性	100	25.7	
	合計	566	34.9	
	合計	566	34.9	
仕事時間	子育て家庭・男性	186	620.5	**
	子育て家庭・女性	203	178.6	
	非子育て家庭・男性	77	585.6	
	非子育て家庭・女性	100	276.0	
	合計	566	396.4	
	合計	566	396.4	
家事・育児時間	子育て家庭・男性	186	71.3	**
	子育て家庭・女性	203	487.5	
	非子育て家庭・男性	77	57.5	
	非子育て家庭・女性	100	274.8	
	合計	566	254.6	
	合計	566	254.6	
趣味時間	子育て家庭・男性	186	118.7	**
	子育て家庭・女性	203	133.1	
	非子育て家庭・男性	77	126.7	
	非子育て家庭・女性	100	219.6	
	合計	566	142.8	
	合計	566	142.8	
その他時間	子育て家庭・男性	186	177.8	**
	子育て家庭・女性	203	229.5	
	非子育て家庭・男性	77	215.5	
	非子育て家庭・女性	100	249.7	
	合計	566	214.2	
	合計	566	214.2	

2-1-2 男女別子育て家庭の生活時間の概要

男女別で「子育て家庭」「非子育て家庭」に分類して、生活時間の分析を行った(表2)。「睡眠時間」には、有意な差は見られなかったが、それ以外の生活時間では、有意な差が見られた。「仕事時間」が最も長いのは、「子育て家庭」の男性(620.5 分)で、「非子育て家庭」の男性よりも、35 分程度長いという結果になっている。女性では、逆に、「非子育て家庭」の方が 100 分程度長いという結果になっている。

「家事・育児時間」は、「子育て家庭」の女性で男性の 7 倍程度と特に長い。この 487.5 分(8.1 時間)という時間は、例えば、NHK 国民生活時間調査の成人女性の平均 4.25 時間と比べても、長い(NHK 放送文化研究所編 2011 : 89)³⁾。NHK 調査によれば、成人女性の「家事・育児時間」は、減少傾向にあるとされる。しかし、この「子育て家庭」の結果を見ると、それでも、1 日の中で圧倒的な割合を占めていると考えられる。NHK 調査では、成人男性は、一貫して、「家事・育児時間」が増加しているとされるが、それでも、2010 年調査で、50 分となっている。「子育て家庭」の男性は、成人の平

均よりも、「家事・育児時間」が長い傾向にあると考えられる。

「趣味・娯楽時間」は、「非子育て家庭」の女性で特に長い傾向が見られた(219.6 分)。これは、男性や「子育て家庭」の女性よりも 90 分～100 分程度長い結果になっている。この「趣味・娯楽時間」を就業形態別に分析をすると、専業主婦で、有意に長いことがわかっている(二方龍紀 2011 : 78)。

「その他時間」に分類されるのは、「食事・入浴・身の回りの用事など」であり、性別によって、身の回りの支度にかかる時間が、社会的に違う場合も多いと考えられるため、別にして比較してみる。男性では、「子育て家庭」の方が短い(「子育て家庭」177.8 分、「非子育て家庭」215.5 分)。女性でも、「子育て家庭」の方が短い、男性よりも、その差は少ない(「子育て家庭」229.5 分、「非子育て家庭」249.7 分)。

2-2 子どもの年齢別の生活時間

表3 末子年齢別回答者の生活時間（平日）				
		度数	平均(分)	検定
睡眠時間	0歳児	33	376.4	
	1歳～3歳未満	96	403.1	
	3歳以上小学生未満	86	405.4	
	小学生	107	396.6	
	中学生／高校生	67	385.6	
	合計	389	396.5	
通勤時間	0歳児	33	29.3	*
	1歳～3歳未満	96	21.8	
	3歳以上小学生未満	86	38.1	
	小学生	107	40.3	
	中学生／高校生	67	39.0	
	合計	389	34.1	
仕事時間	0歳児	33	355.5	**
	1歳～3歳未満	96	298.9	
	3歳以上小学生未満	86	419.8	
	小学生	107	419.2	
	中学生／高校生	67	452.0	
	合計	389	389.9	
家事・育児時間	0歳児	33	405.3	**
	1歳～3歳未満	96	412.7	
	3歳以上小学生未満	86	256.1	
	小学生	107	237.3	
	中学生／高校生	67	176.2	
	合計	389	288.5	
趣味時間	0歳児	33	80.2	**
	1歳～3歳未満	96	103.9	
	3歳以上小学生未満	86	124.0	
	小学生	107	142.3	
	中学生／高校生	67	158.1	
	合計	389	126.2	
その他時間	0歳児	33	193.5	
	1歳～3歳未満	96	199.6	
	3歳以上小学生未満	86	196.6	
	小学生	107	204.3	
	中学生／高校生	67	229.1	
	合計	389	204.8	

前節でみたように、「子育て家庭」と「非子育て家庭」の生活時間の差は大きい。それでは、その「子育て家庭」の中では、子どもの年齢によって、どのような生活時間の差が見られるだろうか。「末子年齢」(その家庭で最も年齢が低い子どもの年齢)で、分析を行った(表3)。

「睡眠時間」については、「0歳」の時に短い傾向(376.4 分)が見られるものの、有意な差は認められない。

「仕事時間」は、「1～3歳未満」の時に、それ以上の年齢の子供がいる場合に比べて、120 分程度有意に短い(「1～3歳未満」298.9 分、「3歳以上小学生未満」419.8 分、「小学生」419.2 分、「中学生・高校生」452.0 分)。

「家事・育児時間」は、「0歳」「1～3歳未満」で、400 分を超えて有意に長い。基本的には、子どもの年齢が上がるにつれて、この時間は、減る傾向にあることがわかる。(「0歳」405.3 分、「1～3歳未満」412.7 分、「3歳以上小学生未満」256.1 分、「小学生」237.3 分、「中学生・高校生」176.2 分)。その中でも、「1～3歳未満」と「3歳以上小学未満」の間の差が大きく、これは、保育所・幼稚園による保育時間と関わっていると考えられる。

「趣味・娯楽時間」は、「0歳」「1～3歳未満」の時に、有意に短い(「0歳」80.2 分、「1歳以上小学生未

満」103.9 分)。この時間は、「家事・育児時間」と逆に、子どもの年齢が上がるにつれ、増加する傾向が見られる。

「家事・育児時間」の中で、「子どもの世話・教育」にかかる時間についてだけ、分析をしてみると、

表4のようになった。

表 4 「末子年齢」別「子どもの世話・教育時間」（平日）									
			子どもの世話・教育時間(6択)					合計	検定
			30分未満	30分以上1時間未満	1時間以上1時間半未満	1時間半以上3時間未満	3時間以上		
末子年齢	0歳児	度数	3	7	4	6	19	39	* *
		%	7. 7%	17. 9%	10. 3%	15. 4%	48. 7%	100. 0%	
	1歳～3歳未満	度数	12	12	4	17	55	100	
		%	12. 0%	12. 0%	4. 0%	17. 0%	55. 0%	100. 0%	
	3歳以上小学生未満	度数	15	17	18	16	31	97	
		%	15. 5%	17. 5%	18. 6%	16. 5%	32. 0%	100. 0%	
	小学生	度数	24	33	22	21	10	110	
		%	21. 8%	30. 0%	20. 0%	19. 1%	9. 1%	100. 0%	
	合計	度数	54	69	48	60	115	346	
		%	15. 6%	19. 9%	13. 9%	17. 3%	33. 2%	100. 0%	

この時間については、「0歳」「1～3歳未満」で、3時間以上の割合が50%程度と特に長いことがわかる。小学生になると、30分以上1時間未満とする家庭も30%程度いる。このように、「子どもの世話・教育時間」は、子どもが通う保育所・幼稚園、小学校の時間枠組みと、大きくかかわっていることが確認できた。

2-3 「子育て家庭」の生活意識－時間意識・悩みや不安

前節で「子育て家庭」の生活時間は、子どもの生活時間とかかわり、大きな特徴があることがわかったが、ここからは、「子育て家庭」の生活意識（時間に関わる意識・生活満足度・家庭内ストレス・育児不安・ワークライフバランス）について、見ていきたいと思う（関連して、「性別」や「末子年齢」などの変数で有意な差が確認できたものについても、分析を進める）。

2-3-1 「時間に関わる意識」「生活満足度」「家庭内ストレス」「育児不安」の違い

表5 男女別「子育て家庭」/「非子育て家庭」での「時間的余裕」意識

			時間的余裕		合計	検定
			忙しい	ゆとりがある		
男女別子育て/ 非子育て家庭	子育て家庭・男性	度数	121	84	205	*
		%	59.0%	41.0%	100.0%	
	子育て家庭・女性	度数	122	102	224	
		%	54.5%	45.5%	100.0%	
	非子育て家庭・男性	度数	36	45	81	
		%	44.4%	55.6%	100.0%	
	非子育て家庭・女性	度数	45	57	102	
		%	44.1%	55.9%	100.0%	
合計	度数	324	288	612		
	%	52.9%	47.1%	100.0%		

日常生活における時間的余裕への意識に関する質問では、「子育て家庭」と「非子育て家庭」の男女で違いが確認できた(表5)。最も忙しいと答えているのは、「子育て家庭」の男性で59.0%、次いで、「子育て家庭」の女性で54.5%となっている。「非子育て家庭」よりも、「子育て家庭」の方が、主観的な時間感覚としても、忙しいと答える割合が高いという結果になっている。

次に、生活の全体における満足度について調べたところ、男女では、違う傾向が確認できた(表6)。全体的に、生活満足度は、女性の方が高い傾向が見られたが、男性では、「子育て家庭」の方が、生活満足度が高い傾向が見られ、それに対して、女性では、「非子育て家庭」の方が、生活満足度が高かった。最も満足と答える割合が高いのが、「非子育て家庭」の女性で、満足が75.7%

表6 男女別「子育て家庭」/「非子育て家庭」での「生活満足度」意識

			生活満足度		合計	検定
			満足	不満		
男女別子育て/非子育て家庭	子育て家庭・男性	度数	131	90	221	**
		%	59.3%	40.7%	100.0%	
	子育て家庭・女性	度数	144	91	235	
		%	61.3%	38.7%	100.0%	
	非子育て家庭・男性	度数	44	44	88	
		%	50.0%	50.0%	100.0%	
	非子育て家庭・女性	度数	84	27	111	
		%	75.7%	24.3%	100.0%	
合計	度数	403	252	655		
	%	61.5%	38.5%	100.0%		

であり、最も満足と答える割合が低かったのが、「非子育て家庭」の男性で、50.0%だった。

表7 男女別「子育て家庭」/「非子育て家庭」での「家庭内ストレスの増減」意識						
			家庭内ストレスの増減			検定
			増えた	変わらない	減った	
男女別子育て/非子育て家庭	子育て家庭・男性	度数	55	146	21	222
		%	24.8%	65.8%	9.5%	100.0%
	子育て家庭・女性	度数	114	85	37	236
		%	48.3%	36.0%	15.7%	100.0%
	非子育て家庭・男性	度数	26	54	8	88
		%	29.5%	61.4%	9.1%	100.0%
合計		度数	233	345	79	657
		%	35.5%	52.5%	12.0%	100.0%

「1年前」と比べて、「家庭内でのストレス」は増減したのかどうかを聞いた質問では、「子育て家庭」の女性の特徴が、確認できた(表7)。「子育て家庭」の「女性」以外では、「変わらない」と答えた割合が、それぞれ、最も高かったのにもかかわらず、「子育て家庭」の女性では、「増

えた」が最も高く 48.3%という結果になった。2-1-2でみた時間分析との関連を考えれば、「子育て家庭」の女性の生活は、特に忙しく、ストレスがたまりやすい状況にあることがわかる。

「育児への不安感」については、いくつかの属性で分析を行ったが、「末子年齢」などでは、有意な差は見られなかった。「性別」では有意な差が見られた(表8)。

表 8 性別による「育児不安」意識の違い						
			育児不安		合計	検定
			不安に感じる	不安に感じない		
性別	男性	度数	77	161	238	**
		%	32.4%	67.6%	100.0%	
	女性	度数	114	137	251	
		%	45.4%	54.6%	100.0%	
合計	度数		191	298	489	
	%		39.1%	60.9%	100.0%	

女性の方が、育児について不安に思う人が多いことがわかった(男性 32.4%、女性 45.4%)。

2-3-2 「仕事と家庭生活の両立」への意識

この「ワークライフバランス」への意識については、より詳しく、「性別」「子育て家庭/非子育て家庭」「末子年齢」から、分析したい。

表9 性別による「仕事と家庭生活の両立」意識の違い							
			仕事と家庭生活の両立について			合計	検定
			非常に困難を感じた事がある	困難を感じた事がある	特に困難を感じたことはない		
性別	男性	度数	22	85	182	289	* *
		%	7. 6%	29. 4%	63. 0%	100. 0%	
	女性	度数	26	94	53	173	
		%	15. 0%	54. 3%	30. 6%	100. 0%	
合計		度数	48	179	235	462	
		%	10. 4%	38. 7%	50. 9%	100. 0%	

まず、性別について、集計を行うと、男性の63.0%は困難を感じたことがないのに対して、女性の69.4%は困難を感じたことがあるという結果であり、大きな差があることがわかる(表9)。

この「仕事と家庭生活の両立」というテーマが、「男性」にとっては、あまり意識されず、「女性」にとっては、大きなテーマとなっていることがわかる。

表10 男女別「子育て家庭」/「非子育て家庭」での「仕事と家庭生活の両立」意識

			仕事と家庭生活の両立について			合計	検定
			非常に困難を感じた事がある	困難を感じた事がある	特に困難を感じたことはない		
男女別子育て/非子育て家庭	子育て家庭・男性	度数	19	62	129	210	* *
		%	9.0%	29.5%	61.4%	100.0%	
	子育て家庭・女性	度数	13	66	28	107	
		%	12.1%	61.7%	26.2%	100.0%	
	非子育て家庭・男性	度数	3	23	52	78	
		%	3.8%	29.5%	66.7%	100.0%	
	非子育て家庭・女性	度数	13	28	25	66	
		%	19.7%	42.4%	37.9%	100.0%	
合計	度数	48	179	234	461		
	%	10.4%	38.8%	50.8%	100.0%		

「子育て家庭」と「非子育て家庭」で大きな差があることがわかる。「女性」では、「子育て家庭」が困難を感じている割合が高いことがわかる（「子育て家庭」73.8%、「非子育て家庭」62.1%）。また、男性でも、「子育て家庭」の方が、両立に困難を感じている（「子育て家庭」38.6%、「非子育て家庭」33.3%）。この「仕事と家庭生活の両立」というテーマの「家庭生活」の中でも、「育児」がしめる割合が高いことが考えられる⁴⁾。

表11 「末子年齢」別の「仕事と家庭生活の両立」意識

			仕事と家庭生活の両立について			合計	検定
			非常に困難を感じた事がある	困難を感じた事がある	特に困難を感じたことはない		
末子年齢	0歳児～3歳未満	度数	7	36	41	84	
		%	8.3%	42.9%	48.8%	100.0%	
	3歳以上小学生未満	度数	4	37	38	79	
		%	5.1%	46.8%	48.1%	100.0%	
	小学生	度数	16	29	45	90	
		%	17.8%	32.2%	50.0%	100.0%	
合計	度数	27	102	124	253		
	%	10.7%	40.3%	49.0%	100.0%		

ある」の割合が高まるのは、どのような要因か、属性とのかかわりを見ていったところ、「男性」において、有意に、子どもが小学生の時に、「非常に困難を感じたことがある」が、他の年齢に比べて、高い割合を示すことがわかった(表12)。

表12 男性における「末子年齢」別の「仕事と家庭生活の両立」意識

			仕事と家庭生活の両立について			合計	検定
			非常に困難を感じた事がある	困難を感じた事がある	特に困難を感じたことはない		
末子年齢	0歳児～3歳未満	度数	3	22	39	64	*
		%	4.7%	34.4%	60.9%	100.0%	
	3歳以上小学生未満	度数	3	19	31	53	
		%	5.7%	35.8%	58.5%	100.0%	
	小学生	度数	9	9	34	52	
		%	17.3%	17.3%	65.4%	100.0%	
合計	度数	15	50	104	169		
	%	8.9%	29.6%	61.5%	100.0%		

次に、男女別の「子育て家庭/非子育て家庭」という変数から、分析してみる(表10)。この「仕事と家庭生活の両立」というテーマについての意識は、男女の差があるだけではなく、

「末子年齢」別の分析では、小学生の時の方が、「非常に困難を感じたことがある」の割合が上がるということが分かった（ただし、有意確率は0.050と弱かった）(表11)⁵⁾。この「小学生」の時に、「非常に困難を感じたことが

3. 問題の整理と考察

ここまでの論点をまとめる。

- (1)子育て家庭の女性の家事・育児時間は、非常に長い（1日平均 487.5 分・約 8.1 時間）
- (2)男性でも子育て家庭の家事・育児時間は確保されているが1時間ちょっと（71.3 分）
- (3)子育て家庭の男性の仕事時間は、最も長い（非子育て家庭の男性よりも長い）（1日平均 620.5 分・10.3 時間）
- (4)家事・育児時間は、子どもが 0 歳・1～3 歳未満の場合に、特に長いが、3 歳以上で短くなる（「0 歳」405.3 分、「1～3 歳未満」412.7 分、「3 歳以上小学生未満」256.1 分）
- (5)「時間の余裕」の意識では、「子育て家庭」が忙しいと答える割合が高い。「家庭内ストレス」については、「子育て家庭」の女性が特に増えたと答える割合が高い。「生活満足度」は、女性の場合は、「非子育て家庭」の方が高く、男性は「子育て家庭」の方が高いという特徴が見られた。育児不安も女性の方が高い。
- (6)女性で「仕事と家庭生活の両立」への困難の意識が顕著。特に、「子育て家庭」における困難の意識の割合が高かった。

(2)「男性の育児時間」と(3)「男性の仕事時間」については、(3)が長いから、(2)を伸ばすことができないのではないかと推測される。家計経済研究所の調査によれば、この(2)については、女性の育児時間が長い家庭では、男性の育児時間も伸びることがわかっている。しかし、その係数（伸び率）は、女性のそれよりも、ずっと小さいことがわかっている(福田節也 2011:33) ⁶⁾。男性の生活時間の変化を狭める大きな時間枠組みとして、10 時間を超える「仕事時間」が関係しているのではないだろうか。

(4)「末子年齢別の家事・育児時間」では、前節でも見たように、子どもの年齢が上がるにつれて、「家事・育児時間」が減ることがわかる。保育所・幼稚園の支援があるからと推測される。

(5)(6)の意識面の分析をみると、こうした、実際の生活時間の忙しさは、意識の面にも影響を与えていて、特に、「子育て家庭」の女性が、困難な状況におかれていることがわかる。

4. まとめと課題

前節の整理と考察を踏まえて、生活時間の状況や意識から支援について、検討する。

「子育て家庭」の女性の「家事・育児時間」は、非常に長く、意識の上でも、困難な状況におかれている。ここについては、特に、時間的な余裕が増えるような支援が必要であると考えられる。NHK 調査では、「家事時間(特に、食事の準備時間など)」については、社会資源の活用によって、時間が大幅に減っていると指摘されている(NHK 放送文化研究所編 2011 : 88-89) ⁷⁾。「育児時間」についても、どのような支援が必要か、検討する必要がある。

この「女性」の育児への支援として、まず、「イクメン」のように、夫の支援が重要であるといわれることも多い。しかし、調査から明らかになったように、実際には、「子育て家庭」の男性の仕事時間は、「非子育て家庭」よりも長い傾向が見られる。この 10 時間を超える「仕事時間」を見ると、簡単には、「イクメン」に期待できる社会状況ではないともいえる ⁸⁾。こうした状況を考えると、「子育て家庭」の男性については、まず、「仕事時間」の軽減が必要であり、これは、企業などの労働環境が変わることが必要であると考えられる。まず、「労働時間」を軽減した上で、家事・育児への参加を促

すための施策(例えば、家事・育児の「訓練」の場への参加など)を講じるという、2段階の制度的なサポートが必要である。

「末子年齢」で分析を進めると、「家事・育児時間」は、「0歳」・「1~3歳未満」で特に長いことがわかるので、まずは、こうした年齢の子どもの保育などに、社会的な支援の手立てを増やしていくことが重要であると考えられる。厚生労働省調査によれば、待機児童については、0~2歳児で多いということもあるので、ここへの制度的な支援を増やしていくことが重要である(内閣府編 2013 : 64)。

こうした「子育て家庭」の逼迫した生活時間は、「子育て家庭」の意識(家庭内ストレスや育児不安など)にもかかわっていると考えられるので、バックアップ体制を充実させていくことによって、こうした不安や悩みが低減され则认为られる。また、「子育て支援センター」などで行われる育児相談の制度を、より身近なものにしていくことも、こうした不安や悩みを軽減させるためには重要である。

本稿の分析は、試行的なもので、まだまだ、課題も多い。今回の分析では、平日の分析にしぼったが、休日の生活時間についても、分析を加える必要がある。特に、男性の家事参加は、休日行われているという研究もある(NHK放送文化研究所 2011 : 89)。

また、社会的な支援によって、生活時間がどの程度変わり、意識の上でも、どれくらいの不安感や悩みの低減があるのか、具体的なデータから検証する必要がある。

当然のことだが、1日の生活時間は、誰にとっても、同じ24時間である。しかし、その使い道は、大きく違うというのが、時間資源の分析で興味深いところだ⁹⁾。今回の分析では、「子育て家庭」「非子育て家庭」という変数、そして、性別という変数を基本として、分析を進めたが、同じ24時間の中でも、それぞれで大きな違いが確認できた。「はじめに」で触れたように、それぞれの「生活時間」は、社会に規定される「社会的時間枠組み」と調整をしながら、工夫をして、やりくりをしながら、過ごされているものだ。そういう意味では、「子育て家庭」と「非子育て家庭」で、社会的に規定される時間枠組みが異なるという背景も考えられる。

「ワークライフバランス」や「少子化」という問題を考えると、この社会的に規定される時間枠組みを、うまく、人々の間で分け合い、調整していくということが重要になる。このためには、「制度」や「政策」をこうした視点から立案し、社会的な時間枠組みと、人々の生活時間の調整をサポートできるようなシステムを構築していくことが重要になるだろう。そのためには、まずは、現状を確認し、どのような手立てが、有効なのかを冷静に考えていく必要がある。

今回は、支援という観点から「子育て家庭」の悩みや困難に焦点を当てたが、「子育て家庭」の女性において、男性よりも、生活満足度が高いように、「子育て」によって、得られる楽しみや充実感もちろん大きいものだ。この「子育て」の楽しみや充実感を、より多くの場面で実感できるようにするためにも、社会がサポートすることが重要である。そのためには、「父」「母」だけではなく、「社会」もまた、その子の「親」の一人として、「子育て」に参加していくことが求められている。

注

- 1) 内閣府によって、「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」が取りまとめられたのは、平成19年である。
- 2) なお、この調査(「生活時間と生活の質に関する調査」)は、上智大学生生活時間研究会が、2009年10月20日~2009年11月6日にかけて、全国の20歳から59歳の既婚の男女1200名を対象に、郵送法で行ったものである。有効回収率は、55.0%だった。

この調査は、次の研究の一部である。

平成 20 年度～22 年度「科学研究費補助金基盤研究(C)(一般) 時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会学的分析」(研究代表者 藤村正之)

この研究は、上智大学生生活時間研究会 2011 にまとめられている。

本稿で使われている各変数は、次の通りである(それぞれの変数は、分析に合わせて、適宜、選択肢を足し合わせるなどの整理をしている)。

「生活時間」…問 16「あなたの生活行動のなかで、以下の A～F の時間はどれくらいでしょうか。平日、休日(仕事や勤務のない日)のそれぞれについて、合計で 24 時間になるようにお答えください。なお、同時に複数の行動をされた場合は、主なほうでお答えください A 睡眠/B 通勤/C 仕事/D 家事・子育て・介護/E 趣味・娯楽・交際/F 上記以外の食事・入浴・身の回りの用事」とする設問を使用した。本稿では、「A 睡眠」を「睡眠時間」、「C 通勤」を「通勤時間」、「C 仕事」を「仕事時間」、「D 家事・子育て・介護」を「家事・育児時間」、「E 趣味・娯楽・交際」を「趣味時間」、「F 上記以外の食事・入浴・身の回りの用事」を「その他時間」としている。

「子育て家庭/非子育て家庭」…問 5「あなたにお子様はいらっしゃいますか」で子どもがいると答えた回答者のうち、付問の「上記の設問で 1 から 5 に回答をいただいた方にお聞きします。お子様の就学などの段階を以下から選択してください。なお、お子様が複数いらっしゃる方は一番年齢の低いお子様のことについてお答えください」(「末子年齢」)で、「1. 0 歳児」「2. 1 歳～3 歳未満」「3. 3 歳以上小学生未満」「4. 小学生」「5. 中学生/高校生」と答えた回答者を「子育て家庭」とし、それ以外の回答者を「非子育て家庭」としている。

「末子年齢」…上記問 5 の付問での「1. 0 歳児」「2. 1 歳～3 歳未満」「3. 3 歳以上小学生未満」「4. 小学生」「5. 中学生/高校生」「6. 大学生/大学院生/短大生/専門学校生/予備校生」「7. 就職(アルバイト含む)または結婚している」を分析に合わせて、再分類している。「8. その他」については、欠損値として分析から外した。

「子どもの世話・教育時間」…問 23「以下の家事行動に関して、通常の平日、休日にそれぞれ 1 日あたり合計でおおよそどれくらいの時間を費やしていますか。該当する時間区分を以下の 1～10 から選択し、その番号を〔 〕内に記入してください。同時に複数の行動をされた場合の時間は、主にした行動の方の時間としてお答えください」という設問の中で、「C 子どもの世話・教育」の回答時間を使用している。選択肢は、「1. 15 分未満」「2. 15 分以上 30 分未満」「3. 30 分以上 45 分未満」「4. 45 分以上 60 分未満」「5. 60 分以上 75 分未満」「6. 75 分以上 90 分未満」「7. 90 分以上 120 分未満」「8. 120 分以上～180 分未満」「9. 180 分以上」「10. 全くしていない」である。

「時間的余裕」…問 27「あなたの日常生活は時間的に見て忙しいですか、ゆとりがありますか」という設問を使用した。選択肢は、「1. かなり忙しい」「2. 多少忙しい」「3. 多少ゆとりがある」「4. かなりゆとりがある」である。「5. どちらともいえない」は、欠損値として、分析から外した。

「生活満足度」…問 31「あなたは現在の生活を全体としてどのようにお感じになっていますか」という設問を使用した。選択肢は、「1. 満足している」「2. どちらかといえば満足している」「3. どちらかといえば不満である」「4. 不満である」であり、分析に応じて、再分類して、使用した。

「家庭内ストレス」…問 41「1 年前とくらべて家庭内でのストレスは増えましたか、減りましたか」という設問を使用した。選択肢は、「1. かなり増えた」「2. やや増えた」「3. 変わらない」「4. やや減った」「5. かなり減った」であり、分析に応じて、再分類して使用した。

「育児不安」…問 35「生活のなかでの以下の各項目について、あなたは現在どのようにお感じになりますか。それぞれ該当する数字をひとつお選びください」の中で「D 育児」という設問を使用した。選択肢は、「1. 不安を感じる」「2. やや不安を感じる」「3. あまり不安に感じない」「4. 不安に感じない」であり、分析に応じて、再分類して使用した。「5. あてはまらない」は、欠損値として、分析から外した。

「仕事と家庭生活の両立」…問 22「あなたはこれまで仕事と家庭生活の両立について困難を感じたことがありますか。以下から該当するものを 1 つお選びください」という設問を使用した。選択肢は、「1. 非常に困難を感じた事がある」「2. 困難を感じた事がある」

「3. 特に困難を感じたことはない」である。「4. わからない」は、欠損値として、分析から外した。

なお、検定は、表1～3は、一元配置分散分析、表4～12は、カイ二乗検定である。＊は5%、＊＊は1%の有意水準であることを示す。

3) この調査の特徴としては、NHK国民生活時間調査に比べて、「家事・育児時間」が長いことがある。NHK調査では、女性の家事時間は、平日平均3.13時間（2010年・全体平均時間）であり、この調査では、女性の家事時間は、平日平均6.9時間(416.9分)となっている。これは、対象の違いとも関わっている（NHK調査の対象は、全国10歳以上の国民(7200人)であり、この調査の対象は、全国20～59歳の既婚男女(1200人)である）。NHK調査でも、女性全体では、家事時間は、減少の傾向とされるが、30代での行為者時間での家事時間は6.1時間となっている（NHK放送文化研究所2011：88・205）。

4) この調査では、「非常に困難を感じたことがある」と「困難を感じたことがある」と答えた回答者に、付問として、「最も「困難を感じた」のはどのような場面ですか」とする質問をして、「仕事と子育て」「仕事と介護」「仕事と家庭問題（子育て・介護以外）」などの8つの選択肢から答えてもらっている。最も多いのは、「仕事と子育て」で53.3%となっている。

5) 第一生命経済研究所2010によれば、仕事と家庭の両立についての悩みで最も多いのは、「子どもや家族が病気になったときに、休みを取りにくい」で23.9%であり、他にも「子どもの遊び相手をしたり、勉強を見る時間がない」10.8%、「家事・育児を行う時間がない」9.5%など子どもとの家庭生活に関わる悩みが多い。同じ調査によれば、この悩みが最も多いのは、「末子が未就学」の場合で女性の84.4%、男性の56.2%とされている。

6) 福田節也は、男性の家事・育児時間が増える場合は、女性の家事・育児時間が減るというのではなく、男性の家事・育児時間が増える場合は、女性も家事・育児時間が増え、しかも、女性の方が、増える係数が高いと指摘している。

「妻の家事・育児時間は、夫の家事・育児時間の増加に伴い増えている。また、夫の家事・育児時間も妻の家事・育児時間の増加によって増える傾向がある。つまり、夫妻の家事・育児時間は、どちらかが増えればどちらかが減るという代替的な関係にあるのではなく、むしろライフコースにおける家事・育児時間の相補的な関係にあるといえる。しかし、係数の大きさが夫妻で大きく異なることで明らかに、妻の家事・育児時間は、夫の家事・育児参加によって大きく増加する傾向があるのに対して、夫の家事・育児時間は妻の家事・育児時間が増えてもそれほど大きな増加を示さない。出産などによる家事・育児時間の増加は、主に妻によって担われており、夫による関与は低いことが示唆される」（2007：33）

7) NHK放送文化研究所2011では、次のように指摘される。「成人女性の家事時間は、平日では1970年から2000年にかけて、土曜・日曜ではともに1975年から1995年にかけて急激に減少している。これは①ファミリーレストランなどの外食産業の発達、②冷凍食品や調理済み食品の充実と電子レンジや大型冷蔵庫などの普及、③未婚率の上昇による家事をしない女性（特に20代）の増加、などが要因と考えられる」（2011：88-89）

8) NHK放送文化研究所2011では、男性の育児の内容について、次のように指摘されている。「男性は、どんな「子どもの世話」をしているのだろうか。時事通信社が2010年6月に実施した「父親の育児参加に関する世論調査」によると、子どものいる男30代にどのような育児をしている（した）かを尋ねたところ、複数回答で「遊び相手をする（96%）」や「お風呂に入れる（93%）」という回答が上位を占めた」（2011：91-92）このような回答からは、「仕事時間」に支障がない範囲で、どうにか、工夫しながら、帰宅後や休日に育児に参加している姿が見えてくる。

9) 二方龍紀2011では、同じ調査データから、この時間資源と経済的資源（金銭的ゆとり）のかかわりを分析している。そこで見えてくるのは、「時間資源」に余裕があり、さらに、「経済的資源」にも余裕がある回答者と、そのどちらにも余裕がない回答者の2極化だ。「金銭的なゆとりへの印象と時間的なゆとりへの印象はトレードオフの関係にあるのではなく、金銭的ゆとりと時間的なゆとり両方を得ていると感じている人がいる一方で、両方を失っていると感じている人がいる傾向が見て取れる」（2011：88）と指摘している。

参考文献

- 福田節也,2007,「ライフコースにおける家事・育児遂行時間の変化とその要因—家事・育児遂行時間の変動要因に関するパネル分析」『季刊 家計経済研究』76:26-36.
- 二方龍紀,2011,「余暇時間・生活の豊かさ・消費行動の分析」『平成 20 年度～22 年度 科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)研究成果報告書 時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会的分析』第 I 部第 5 章 上智大学総合人間科学部社会学科.
- 上智大学生生活時間研究会,2011,『平成 20 年度～22 年度 科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)研究成果報告書 時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会的分析』上智大学総合人間科学部社会学科.
- 加藤寛監修・第一生命経済研究所編,2010,『ライフデザイン白書 2011 表とグラフで見る日本人の生活と意識の変化』ぎょうせい.
- 内閣府編,2013,「平成 25 年版少子化社会対策白書」勝美印刷.
- NHK 放送文化研究所編,2011,『日本人の生活時間・2010 NHK 国民生活時間調査』NHK 出版.

SUMMARY

The purpose of this paper is to examine the time use of "child-rearing Family," and to consider the way of the support. Housework and childcare time of child-rearing family is very long on women. Working hours of men in child-rearing family is the longest. Housework and childcare time is particularly-long in the family which has the child from 0 to 3 years old, but it is reduced in the family having the child of 3 years or older. In the attitude of the "busyness", "child-rearing Family" has tendency to answer that he/she is busy. Married women have a tendency to answer that "work-life balance" is difficult. In particular, the proportion of attitude of difficulties is high in "child-rearing Family".